

二〇二四年五月三日

花虻の出入り忙しき車輪梅
焼かれる岩魚おほきく口を開け
教室の窓に校歌の山笑ふ
畑しごと頑張れと背に春日燦
沢蟹の砦としたる河原石
初宮の双子に翳す楠若葉
風光るバックミラーに富士の山
水かげろふ秀枝にあそぶ若楓
塩むすび新茶うましと頬張りぬ

むべ
かえる
はく子
千鶴
かえる
もとこ
澄子
康子
澄子

二〇二四年五月二日

かずら橋渡る一步に岩つつじ
里一面ウエーブなして麦青む
かたばみの花の陣なす出城址
雪解水富士の裾野に高鳴りぬ
激流に分け入り鮎の竿をふる

愛正
かえる
むべ
澄子
かえる

二〇二四年五月一日

詮無しやベンチを埋む桜蕊
軽トラの窓から足や三尺寝
街薄暑上着を肩に就活生
農小屋でやりすごしたる春驟雨

せいじ
みきお
康子
千鶴

二〇二四年四月三〇日

髪切りしうなじくすぐる若葉風
囀りに目覚めの朝戸繰りにけり

きよえ
澄子

二〇二四年四月二十九日

子ら駆けて花吹雪また花吹雪
激つ瀬を一筋よぎる蜘蛛の糸
大富士に向かひて泳ぐ鯉幟

風民
康子
澄子

二〇二四年四月二十八日

藤房の風に揺らげる二尺かな

あひる

二〇二四年四月二十七日

遮断器のなき踏切や青き踏む
あるじ居ず蜘蛛の囀やぶれかぶれかな
風紋となる校庭の花の塵
草笛を教ふ老翁得意顔
工房の街藍匂ふ薫風裡

澄子
せいじ
風民
もとこ
澄子

毎日句会みのる選・二〇二四年五月五日